

たとえば「目」のことを英語では「EYE」と言います。「みる」に相当する英語は「SEE」とか「LOOK」とか「WATCH」などです。

EYEは漢字では「目」と書きます。SEEに当たるものが「見(ケン)」、LOOKは「視(シ)」、WATCHを「観(カン)」とすれば、いずれの漢字にも「目」が入っています。つまり「目」という字をいったん学べば、これが使われている睡、眼、眠、省、督といった字は、目に関係のある文字であることが当然類推されます。この「類推する」とか「推理する」ということは、幼児の脳の発達に欠かせない要素です。

私が口が酸っぱくなるほど、くり返している「漢字を教える」のではなく、「漢字で教える」とは、そういうことなのです。

漢字は表音と表意を兼ねています。一般的に漢字は左の部分が意味をもっていて、右の部分は発音を表わしています。こういう体系をもつ文字は、漢字以外はありません。実は、創作された文字というのは、例外なく表音と表意を兼ねた表語文字です。つまりスメールの文字に始まってエジプトの文字、インドの文字、そして漢字は、表音文字であるアルファベットとは異なり、人類が創作した文字は、すべてこういう体系をもっているのです。

ですから、表語文字を学んだ人と表音文字を学んだ人とでは、当然

頭の働きが違って来るわけです。しかも、それは幼児期に学んだ場合に、大人になってからその差がはっきりと出てくるのです。といっても、小学校へ上がってから習ったのでは、大した違いは出てきませんが、幼児期に学べば歴然たる差が出てきます。最初に紹介したIQの11の差というのは、大変重大な意味をもっています。私の実験したところによると、3歳から十分な漢字教育を受けた子どもは、平均知能指数が低い場合でも130になります。130というのは、英才とか秀才と称せられる知能をもった子どものレベルです。こういう意味でも漢字教育を徹底してやっていただきたいのです。子どもの学習というものは、どんな学習でも国語力が基本になっているということを理解してほしいのです。

たし算やかかけ算はできるのに、文章問題はできないというのは、算数ができないのではなく、問題の意味がわからないのです。子どもを算数嫌いにさせたくなかったら、本を読むことを好きにさせなければいけません。そのためには、言葉、つまり漢字を好きにさせることです。

**ポイント:** 小学校一年生を担当して漢字を教えてみて気がついたのですが、成績のよくない子というのは漢字しか覚えられないのです。それで漢字はやさしいのだということがわかったのです。